

私たち日本の宗教者は 日本が「核の傘」依存をやめ、 「北東アジア非核兵器地帯」の 設立に向かうことを求めます。

核兵器は、そのいかなる使用も壊滅的な人道上の結末をもたらすものであり、私たちの宗教的価値、道義的原則、そして人道法に反します。従って、宗教者にとって核兵器の禁止と廃絶は、神聖な責務であります。

「核兵器のない世界」実現のためには、すべての国が核兵器に依存しない安全保障政策をとる必要があります。被爆を経験した日本は尚更であり、一日も早く「核の傘」から出ることが求められます。北東アジア非核兵器地帯の設立は、日本の安全を確保しつつ「核の傘」から出ることが可能にする政策です。それは、「核兵器のない世界」に向けた国際的気運を高めるとともに、深刻化した北東アジア情勢を打開する有効な方法でもあります。

2013年7月、国連事務総長の軍縮諮問委員会が「事務総長は、北東アジア非核兵器地帯の設立に向けた適切な行動を検討すべきである」との画期的な勧告を行いました。また、2013年9月の国連ハイレベル会合において、モンゴルのエルベグドルジ大統領は、北東アジア非核兵器地帯の設立への支援を行う準備があると表明しました。さらには、米国、オーストラリア、日本、韓国などの著名な研究者たちが北東アジア非核兵器地帯設立への包括的なアプローチを提案しています。

私たち日本の宗教者は、北東アジア非核兵器地帯の設立を支持し、これによって日本が非人道兵器である核兵器への依存から脱し、被爆国として積極的に「核兵器のない世界」実現に貢献することを求めます。

北東アジア非核兵器地帯構想とは

1990年代半ば以降、研究者やNGOからさまざまな「北東アジア非核兵器地帯」の提案が出されました。その一つが、韓国・北朝鮮・日本の3カ国が非核兵器地帯を形成し、この地域にかかわりの深い3つの核保有国（米国、ロシア、中国）が核攻撃をしないという消極的安全保証を供与する、「スリー・プラス・スリー（3+3）」の6カ国条約構想です。546自治体の首長がこれに賛同し、日本政府と国連に署名を提出しました。続いて宗教者が声を上げています。

非核兵器地帯のウェブサイト

www.peacedepot.org/theme/nwzf/list1.htm

ご賛同いただける宗教者の方は以下から回答用紙をダウンロードし、メールまたはFAXください。宗教者でない方はこのキャンペーンをお知り合いの宗教者にご紹介ください。
www.peacedepot.org/theme/nwzf/160810-answer-sheet.docx

連絡先：ピースデポ

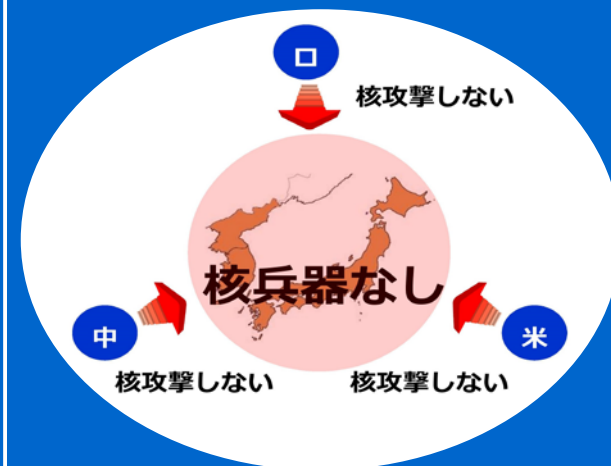
〒223-0062 横浜市港北区日吉本町 1-30-27-4
1F

E-mail: office@peacedepot.org
TEL: 045-563-5101 FAX: 045-563-9907

協賛：世界宗教者平和会議日本委員会（WCRP）

北東アジア非核兵器地帯 を求める 宗教者キャンペーン

あなたも宗教者声明の
呼びかけ人・賛同人になっていただけ
ませんか？



宗教者声明・代表呼びかけ人（50音順）

小橋孝一（日本キリスト教協議会議長）

杉谷義純（世界宗教者平和会議

軍縮安全保障常設委員会委員長）

高見三明（カトリック長崎大司教区大司教）

山崎龍明（浄土真宗本願寺派僧侶）

こばしこういち
小橋孝一

日本キリスト教協議会議長



「キリスト者の立場から言うと、イエス様が自分が捕らえられるときに、弟子に向かって『剣（つるぎ）をさやに納めなさい。剣を取るものは剣によって滅びる』と言われた（新約聖書マタイによる福音書 26 章 52 節）。核兵器は究極の暴力、剣だと思うが、核兵器を取る者は核兵器によって滅びるといふのは、歴然と今われわれの目の前にある事態です。要するに核兵器に依存して核兵器を相手に突きつける、それが平和を維持する手段だということはもはや言えない。」

すぎたにぎじゅん
杉谷義純

世界宗教者平和会議
軍縮安全保障常設委員会委員長



「核兵器の存在は、本質的に疑心暗鬼の関係が生じ易く相互の憎悪を増長させるものです。そして一度でも使用されたなら、計り知れない悲劇を生み出す。まさにこの世に存在が許されない兵器です。仏教経典の中に『兵戈無用』（ひょうかむよう）という言葉があります。これは軍隊や兵器が全く役立たないという意味です。そうした世界の実現をただの理想ではなく、人類の未来における現実を示しているとみるところに宗教者の平和運動の原点があるので。」

北東アジア非核兵器地帯を 私たちは求めます！

代表呼びかけ人メッセージ

被爆国が「核の傘」から出なければ、
核なき世界を実現する使命を果たせない。

フランシスコ・ローマ法王

2015年9月25日国連総会にて

国連憲章の前文と第1章は、平和、紛争の平和的解決、各国間の友好関係の発展、という国際的な司法枠組みの土台を規定しています。これらの規定と鋭く対立し、実質的にそれらを否定しているのが、兵器、特に核兵器など大量破壊兵器の拡散を絶えず志向する気運です。相互破壊—おそらく全人類の破壊—の脅しに基づく倫理や法は自己矛盾であり、国連の枠組み全体を侮辱するものです。

世界宗教者平和会議声明「核兵器廃絶に向けた国際特別セッション—ICJ 勧告的意見から20年」

2016年8月3日国連大学にて

核兵器の使用もしくは保有を非とする道義的・倫理的責務は、人間の良心の奥底から生じるという理由から、すべての善意の男女に通用するものであることを確信する。そうした人間の良心は、核兵器の適法性に関する技術的な議論以上に根源的であり、さらにそうした議論の基盤にもなるからである。

たかみみつあき
高見三明

カトリック長崎大司教区大司教



「平和主義の宗教者は現実を知らないとしばしば非難されるが、人間が現実を作るのである。武器を持つか持たないかを決めるのは人間である。ある人々は相手が武器を持ったなら自分も武器を持たなければならないと考え、しかも武器を取って身を守り、人を殺して支配しようとする。人のものを奪って所有しようとする。国の為政者が単に支配欲や所有欲に捕らわれると、国と国との争いになる。宗教者はこういった暴力、支配欲、所有欲などの人間の内面の問題に関わる役割を果たさねばならない。」

やまざきりゅうみょう
山崎龍明

浄土真宗本願寺派僧侶



「『聖書』の『汝、殺すなかれ』『まず剣をさやにおさめよ』に対して、仏陀は『殺してはならない。殺させてはならない』と言われた。これに尽きます。

『殺してはならない。殺させてはならない』と私たち宗教者は口を開けば言うけれども、そのことが今日の社会的なさまざまな命の問題にきちっとリンクしていかなければならない。むしろ机上の空論になっているということを、自分の中に問うてみたい。」